# 専務理事就任にあたって

財団法人日本ハンドボール協会創立五〇周年を迎え、五一年をスタートしようとするとき、はからずも専務理事の大役をおおせつかりただただ身の引締まる思いである。私自身その任ではないし、関係各位のご協力によってのみこの大任を果たすことができるものと考える。しかし、お引き受けするからには、ない力と能力をふりしぼって努力し協会発展のために貢献したいと思うので、折にふれ叱咤激励をいただくようお願いする。

さて、いま日本ハンドボール協会がなにをなすべきかを考えると、国際的な問題、国内的な問題のいずれにしても対処しなければならない多くの課題をかかえている。ハンドボールがオリッピックに再登場した一九七二年ミュンヘン・オリンピックを前後して国際的な交流が頻繁になり、世界選手権、ジュニア世界選手権、これらにともなうアジア予選そしてアジア選手権、アジア大会など盛りだくさんのスケジュールを消化しなければならなくなっている。当然のことながら、これに臨むナショナルチームの強化対策も充分に果たされなければならない。

一方目を国内に転ずれば、過密な大会スケジュールの調整と位置づけ、そして国際大会との調整などをふくむ長期的計画の確立と行事に伴う財政の確立など解決しなければならない課題が山積みしている。

これらの課題は、長年にわたってハンドボール協会がかかえている課題であり、今一気に解決することは至難の技であるが、だからといって放置できる問題ではない。どこから手をつければよいのか模索中ではあるが、事業計画の確立という面から少しでも課題の解決を目指していきたい。ともするとドロ縄式の運営が発生する外国チームの招待と海外遠征についても、相手との問題があるので難しい面はあるが、こちらが主体性をもって計画的な招待と遠征ができるような運営をしたい。このためには、国内のすべての計画が充分に審議され確立されていなければならないであろう。

そして、当面の課題いや使命は'88ソウル・オリンピックの出場権を獲得することである。ともすると地盤沈下の現象を呈する日本のハンドボールが、せめてかつて君臨したアジアのキングとクイーンの座に返り咲かなければならない。さきに世界のトップチームを招いて開催された『東洋証券ハンドボール　ジャパンカップ'87』の開催目的の一つはここにあった。わがナショナルチームは第一戦より第二戦、第二戦より第三戦と世界の強豪を相手に次第に好ゲームを展開した。八月二〇日から三〇日にヨルダンのアンマンにおいて開催されるアジア選手権大会〔ソウル・オリンピックアジア予選を兼ねる〕まで残る少ない時間を有効に使って競技力の向上に努め、ソウルへの指定券を獲得しなければならない。このことは、日本ハンドボール界にとって達成されなければならない悲願であり、全国の関係諸氏の激励とご協力をお願いする。

今年度は、年度変りに大きな事業をかかえ、協会運営のすべての面で遅滞しているが、新メンバーの諸氏と協力してよりよい協会運営に努力したい。いずれにしても各都道府県協会、各連盟をはじめ関係各位のご支援とご協力なくしては達成できないことであり、かさねてよろしくお願いする。

# 各担当理事抱負を語る

## 強化担当　北川勇喜

### アベック出場を果たしたモントリオールの快挙を再び実現させたい。

一九七二年ミュンヘン・オリンピックに初出場した全日本男子チームは、続くモントリオール、モスクワ、そしてロサンゼルスと、チームボールゲームの中では、唯一の連続出場権を獲得して斯界の期待に応えている。

一方女子は、一九七六年モントリオール・オリンピックに男子とともに初参加し、堂々五位の成績を挙げて茶の間にハンドボールの名声を膾炙させたが、しかし、続くモスクワ、ロサンゼルスと予選で敗退し、せっかくの蕾かかったハンドの花を萎ませてしまった。

あれから12年、我が国の先輩諸兄が蒔いた種で大きく育ったソウルでのオリンピック、なんとしてでも男女を出場させ、世界のトッププレーヤーと技を競わせたいものである。

### ワーストコンデションの中で、ベストを尽くせるか。

去る7月6日、AHFからのテレックスで、アジア選手権兼ソウル・オリンピック予選には、男子は日本、韓国、中国、台北、ヨルダン、イラク、シリア、クウェート、カタール、バーレン、パレスチナ、ネパールの12ケ国、女子は、日本、韓国、中国、台北、ヨルダン、シリアの7ケ国がエントリーしたとの通知があった。

試合方式は未決定だが、いずれにしてもアジア選手権は、男子は日本、韓国、中国、クウェート、女子は日本、韓国、中国の争いであり、ソウルの切符は男女とも、中国と眦を決した勝負になることは間違いない。

したがって、男子チームは、ミュンヘン・オリンピックで世界をあっといわせたムササビシュートの野田監督、世界の一流監督と肩を並べている智将の井監督が天、地に利が悪いワーストコンデションの中で、いかにチームやプレイヤーのベストを引き出すか。これが勝負の分れ目になりそうだ。

### 日本丸の浮沈みがかかったソウルへ、皆んなが挙って応援して送ろう

去る3月末、AHFがアジア選手権兼オリンピック予選は、8月末ヨルダンのアンマンに決定との通知を受けてからの男女ナショナルチームの強化は凄まじいものになった。

まず、男子は3月末に韓国遠征、4月の中旬に香港大会、5月末から6月はじめのジャパンカップ、7月中旬からのユーゴ親善、8月はじめのソウル国際、そして下旬のオリンピック予選と駒を進め、一方女子は、5月初めのUSAカップ、続いてのロサンゼルス親善、5月末の韓国ナショナルとの合同合宿、そしてジャパンカップ、更に、6月から7月にかけて立石電機で長期合宿、ここでコンビネーションプレーを高め、新戦法を確立し、更にチームワークを向上させて、がっちり井ファミリーチームを築き上げたのである。

このように、3月以降7月までの4ケ月間、男女チームがハードスケジュールに挑んだ甲斐あって、男子は、宮下、首藤の両大砲が力をつけ、ポスチャーの立木が逞しく育ち、GKの矢内が自信をつけた。

一方女子は、沖縄の星・北嘉がソウルの星に大成長し、彼女の太陽のような明るさがチームに反映して、パアッと明るくなったし、2本柱の1人の小池がケガから復活し、主砲・野嶋とともに打ちまくり、磯山のポストプレーに磨きがかかり、名手に育った萬生がしっかりゴールを守り、名リーダーの前田キャプテンがチームを締めれば、必ず好結果を生むに違いない。

みんなで、野田丸、井丸をしっかり応援しよう。

## 審判担当　大塚文雄

私の最重点課題は、若手の優秀なレフェリーの育成とゴールドレフェリー（世界選手権やオリンピックなどを担当するレフェリー）育成である。

まず、良いレフェリーになるには、審判の知識（競技規則の精通・多様化してくるチーム編成や戦術・そしてプレイヤーの多彩なテクニック）と審判の技術（前記の知識をもとに、ゲームをうまく組立てていく「直観力」など）を習得することである。そして、一人一人がどんなゲームをさせたいのか、というハンドボールの理念をもつこと。この理念をもたないレフェリーは、ゲームの中の現象（反則）だけで笛を吹き、やがてゲームの流れのない、こま切れの何の面白味もないものになってしまう。

ハンドボールは、本来スリリンでエキサイティングのスポーツであるはずである。

そのために、審判部では、次の各委員会で課題のため全力をあげている。

### I　審判審査委員会

藤田八郎、岡本克彰、狩野幸介、佐分正典、加藤雅之。

①全日本大会審判員の指導と評価。

②A級、B級申請者の審査

その他、全日本総合、日本リーグ、国際試合の審判員の決定や研修会で解釈の統一や審判技術の向上など、若手レフェリーの育成にも力を入れる。

## Ⅱ 国際審判委員会

光島磯雄、狩野幸介、佐分正典

①国際情報の提供

②国際審判員の指導と評価

その他、国際試合の管理や国際審判員の研修、IHFへの登録などを行っており、日本初のゴールドレフェリー誕生のために、IHF有力者に働きかけもしている。

## Ⅲ ブロック部長、および連盟部長

○ブロック部長

南波恒彦（北海道）、今野雅益（東北）、徳前啓人（北信越）、斉藤実（関東）、吉田元（東海）、藤本昇（近畿）、柳井文治（中国）、松原久七（四国）、日野博（九州）

○連盟部長

近藤金博、（実連）、山下勝司（教職員）、藤田信義（学連）、金原至（高体連）、西川勤也（中体連）、富永劭（自衛隊）。

①ブロックおよび各連盟主催大会の審判長。

②ブロックおよび各連盟の研修会

その他、C級申請者の審査とかブロック内の全日本大会審判員の推薦など行っている。また、各ブロックの審判員の審判技術指導も重要な任務である。

## Ⅳ ルール研究委員会

島田房二、後藤登、清水宣雄、浜田浩和、小笠原久郎、岡本研二、酒井伸夫、西村興八、吉野茂。

①ルールの研究と審判技術の研究

その他、委嘱状、登録、審判手帳作成など事務処理と何といっても重要な仕事は、4年に一度あるIHFのルール改正にともなう日本版ルールブックの作成である。

## Ⅴ 審判部合同委員会

前記各委員会メンバーで構成する会議で、審判部のすべての決定機関である。

①競技規則に関する決定。

②全日本大会審判員の決定（全日本総合、日本リーグなどを除く）。

③審判部の事業、予算の決定

この会議で決定された方針に基づき、その年度審判部は運営されていくのである。

# 技術担当

**阿部徳之助**

技術部の中には、スポーツ・ドクター、トレーニング・ドクター、技術の3部門があり、今後の活動についてご報告します。

### ○スポーツ・ドクター

スポーツ・ドクター群の人たちには、ハンドボール選手たちの健康に対する管理をどうすべきかを検討していただいているところです。スポーツ選手だからといって必ずしも健康であるとは限りません。むしろ最近はスポーツ活動中の突然死が、小学校から高校生にかけて増加している傾向にあるといわれていることから、その予防対策として、運動前のメディカルチェック（内科系）をし、定期的なチェックを受けて、日常、選手の健康を常に把握することによって安心してトレーニングに励み、より良い効果を期待したい。また、外科系ではスポーツによっての障害またはケガなどによって長期間にわたって、残念ながらトレーニングを中止しなければならない不幸なことが起こる。こうした障害やケガの身体部位などを具体的に追跡調査をし、今後の選手たちの予防に役立たせ、選手たちの健康を守っていきたい。

### ○トレーニング・ドクター

これまでもトレーニング・ドクター群では、競技力を少しでも向上していただくために研究報告をしてきましたが、必ずしも現場（監督・コーチ）たちに役立っているとは思われないので、今後は現場の人たちとのコミュニケーションによってこれらを改善したい。

これまで、我が国の男女ナショナル選手たちの体力測定の結果をみると、男子では一九七二年（ミュンヘン）から一九八六年（アジア大会）、女子では、一九七六年（モントリオール）から一九八五年までは、形態、および体力はほとんど変化はない。下肢の筋力、ジャンプ力、持久力は低下の傾向にあるが、今後は世界の上位チームと戦うことのできる体力を身につけていただきたいと考えている。

当然のことではあるが、発達段階に応じた体力を身につけ、個人の体力レベルをどこまで、どのように高めるべきかを検討してみたい。

そのための資料を得るために、各種別における大会出場選手たちの体力測定を実施する運びとなっておりますので、関係者のご協力をお願い致します。

### ○技術

技術を向上させるにおいても、発育、発達段階に応じた技をどこまで、どんな方法で最小限身につけておくべきなのかなどを考えておく必要があろうかと思います。たとえば、この種目はだれにでも共通して必ず身につけさせる技術である。というものを考えてみたい。すなわち、中学から高校生、そしてジュニア・ナショナル選手へとつながることができるものにしたい。

また一方では、外国と我国との試合から技術、戦術、攻撃、防御（ゴールキーパー含む）などについて分析し、その資料などを参考にし、技術の開発や進歩発展につなげたいものです。

この3部門の中には、長期間にわたるものや短期間にできるものなどがありますが、皆さんのご協力をいただきながら実行してみたい。

# 日本リーグ担当

**西村亮治**

満12年を迎えます日本リーグも、名実共に日本のトップチームが競う最高の大会に成長し、定着した感があります。

従来日本協会側より役員が派遣され、各チームの代表委員と共に運営されていたものを、満12年を機に各チーム代表だけの、いわば自前の運営体制となり、また、その代表者（日本リーグ運営委員長）が日本協会の理事として逆に派遣されることとなり、ようやく一人前の団体として運営委員会が認知されたわけであり、画期的な年となりました。

とは申せ、会場確保、観客動員、審判、大会運営等々全国の皆様のご支援あってのものであります。今後とも一層のご協力、ご鞭撻をお願い申しあげます。

### ○62年度事業計画

一、ＪＨＬカップ9月12日～15日
（東京・埼玉・名古屋・大阪）

二、日本リーグ後期63年1月30日～3月6日（全国各地）

62年度は、すでに皆様ご承知のようにオリッピック予選の年であり、ナショナルチームに万全の体制をとってもらうため、前期リーグは中止とし、後期リーグのみの1回総当たり戦を実施する予定となっております。

また、試合数の減により質的低下を防ぐ意味で、一・二部混成による東・西ブロックＪＨＬカップ（リーグ戦）をナショナル選手を除いた留守部隊で、いわば教育リーグを行う予定でしたが、すでにご承知の如く、オリンピック予選が8月に行われるアジア選手権と兼ねることとなり、リーグとしてもナショナル選手のＪＨＬカップ出場を規制しない方針を打ち出しました。これにより、今までとは趣きの異なった試合形式となり、白熱のゲーム展開が期待されます。特に二部チームにとってはまたとない強化のチャンスとなるものと思います。また、本戦の後期リーグも、実力伯仲のチームばかりで、男女ともどこが優勝するかわからない混戦が予想され、ファンにとっては一戦一戦目が離せないゲームばかりになると思われます。

〇63年度事業計画（案）

63年度については、国際カレンダーなどの調整によりますが、基本的には6月～7月・10月～11月に前・後期の日本リーグの実施を計画いたしております。

〇その他

一、マンネリからの脱却

12年も経過すると、ややもするとマンネリ化のきらいは免れません。各運営委員と英知を集め、マンネリからの脱却を考えてゆき、実行して行きたいと考えております。

二、女子チームの増加育成

現在、男子14チーム、女子12チームがリーグに加盟しておりますが、男子はともかく、女子12チームは、国内においても日本リーグ級のチームすべてといっても過言ではありません。女子のレベルアップ、強化のためにも、ぜひチーム数を増すようリーグとしても協力して行きたいと考えております。

## 企画・広報担当　川上整司

ハンドボール競技が、発展しない最大の原因は、広報にあると言われてきた。私も同様で、高校の監督時代にそれを感じとっていた。たしかに、ハンドボール史からみても、特に後半は遅れていたと思う。やがて、そんな機会に巡り会えたら本気でそれを考えてみたいと思っていた一時期もあった。

図らずも現在、企画、広報の仕事を仰せつかり、これがいま、大変な仕事であることを痛感している次第である。インターハイを目指して情熱を傾けていたような単調なものではなく、その数倍も難問であることを再確認している。

まずマスコミに働きかけるには、それなりの資料と内容が充実していることが先決で、現在はそれらが乏しい。

各連盟で選手強化を計ると共に、その大会をもっと華やかにしていけるようなシステムが確立されると良いと思う。いまこそ、どこが悪い、誰がいけないと言うことは、好い加減にして、関係者が前向きで努力し、協力し合う時ではないだろうか。

手はじめとして、どこからかかるかだが、富士山のように高く、そして美しい、世界でも地名度のある山は、頂点と同時に、裾野も一挙に広がっていったのだろうが、裾野を拡大してから頂点強化を計ることが、よりベターなのか分からぬが、今は、強化と普及を同時に行う必要があるのは、ここで言うまでもないことである。

世界を目標に強化するプロジェクトと国内では日本的な方法を企画して普及に勤める必要がある。残念ながら、バレー、バスケット、サッカー、ラグビーなどには、かなりの遅れをとっている。しかし、これには、スポーツそのものの特性、歴史、国民性なども絡み、発展した方法も、それぞれ違うので、善し悪しは一概には言えない。他のある球技などは、どこぞの国で盛んであるからと日本の協会があまり努力せずにマスコミが先に充分なる宣伝をしてくれている種目もある。

ハンドボールは、歴史から見ても、悪い条件下にあったのはたしかであるが、しかし、独自の宣伝方法を一早く編み出す必要があると考えている。

私も先般、ＮＨＫの杉山氏を中心とする日本協会ハンドボール史の編集委員の一員として参加させて戴いたが、その膨大な資料をみて、歴史の重みを感じずにはいられなかった。このことからみても、充分な下地が出来ているのだから、方法を思考することによっては、まだまだ発展の余地を残していると感じた。

報道関係の人たちに、過去何度か、「こんどの試合お願いします。」とたのんできたが、異口同音に、「会場に人を集めたらどうですか」と決まって返ってきた。

「それでなければ記事にはなりません」と言われた。マスコミにのせることも考えなければならないが、とに角、我々がやらなければならないことは、まず内側に目を向けて、ハンドの経験者をもっと引き寄せる方法を考え、試合会場に呼び戻す地道な方法を企画していきたい。と同時に、三年に一度位の割合で国際的なビッグゲームを開催し、外側に向けてのアピールも勿論必要であると考えている。

ジャパンカップが終了し、また、ユーゴ招待と多忙の日々が続き、いまはまだ今後どうすべきか模索の段階である。多くの先輩の豊かな経験と若い人々のアイデアを生かして、より良いハンドボールの今後を築くために、具体的な方針を立てたいと考えている。

また、機関誌の充実を言われるが、編集委員会では、以前から、いろいろと協議を続けているが、いまだに実行に移すことが出来ない。いつも資料、原稿を集めることが精一杯でついつい遅れたり、興味を持てないものになってしまって大変その責任を感じている。

以前より企画しているのは、「日本協会だより」と「中、高校生の技術指導欄」である。だが、あくまでも協会の機関誌であるので、あまり巾を広げるつもりはない。皆さまのご協力を得てより充実した機関誌として残していきたいと考えている。

◇　◇　◇　◇

昭和62・63年度の日本ハンドボール協会理事に就任、各委員会を担当なさった方々に、その抱負について原稿をお願いし、7月20日までに到着した分についてここに掲載させていただきます。

MIZUNO
THE WORLD OF SPORTS

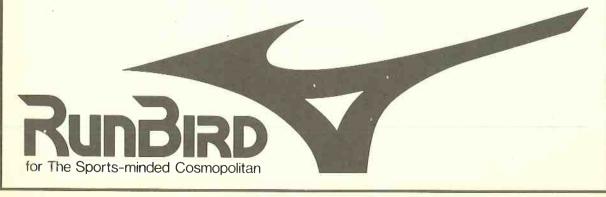
80 SINCE 1906
ボクら、万有引力とたわむれる

コンケーブ意匠
ヘリボーン意匠
サイドモーション サポートリブ
ピボットリング
フレキシブルゾーン

# パワー効率重視。コートのマシン〈ランバード〉

## 室内コート専用のマルチファンクション ソール。

前後左右、あらゆる方向へのトラクション性にすぐれたヘリンボーン意匠をベースに、かかとには着地時の衝撃を吸収、分散するコンケーブ意匠を配置。また、ソール前半にはパワーロスを防ぐサイドモーション サポートリブ、回転運動の軸となるピボットリングをはじめ、屈曲性を高めるフレキシブルゾーンなどをレイアウト。多様なプレーに対応するソールパターンが生まれました。

〈ランバード〉ハンドボール シューズ
**《ウイング ショット》¥12,000**
● 甲/牛革 ● 補強材/人工皮革 ● 底/ラバー ハーフ シェル ソール
● カラー/**16KH-1527** ホワイト・レッドにメタリックネイビー ライン
/**16KH-1562** ホワイトにレッド ライン

## アジア選手権大会日本代表選手団役員

| 役職 | 氏名 | 生年月日 |
|---|---|---|
| 団長 | 北川勇喜 | 1935. 3.11 |
| 男子監督 | 野田　清 | 1946. 4. 5 |
| 男子コーチ | 津川　昭 | 1951. 8. 3 |
| 男子コーチ | 佐藤要二 | 1949.10.16 |
| 男子コーチ | 塙　敏 | 1950. 8.18 |
| 女子監督 | 井　薫 | 1938. 5.29 |
| 女子コーチ | 樫塚正一 | 1944. 7.16 |
| 女子コーチ | 水上　一 | 1947. 1. 1 |
| レフェリー | 島田房二 | 1945. 5.25 |
| レフェリー | 後藤　登 | 1950. 5. 5 |
| レフェリー | 森　敏郎 | 1948. 8,12 |
| レフェリー | 川島克之 | 1944. 5.23 |
| 医師 | 高橋義男 | 1949. 2.17 |

# がんばれ日本！

## ジャパンカップから得たもの
## オリンピック予選突破に向けて

男子日本代表監督　野田　清

日本ハンドボール協会創立50周年記念行事の一環として行われた〝東洋証券ハンドボール　ジャパンカップ'87〟で、世界の最強チームであるユーゴスラビア、西独の両ナショナルチームと対戦する機会を得ましたことは、ソウル・オリンピック予選突破のためチームの強化中であった日本チームにとってはまたとない機会であったので、この大会を生かし、ソウル予選突破に必要な技術、戦術の修得と両国に一矢報い、記念行事に花を添えることを目的に本大会に臨みました。

試合結果は、誠に残念ながら両国のパワーに屈し、1勝もあげることができませんでした。しかしながら、両国との対戦を通じて、①1・2・3・ディフェンスを完成させた、②ゴールキーパーの好守安定、③1試合の¾を自チームのリズムで試合を展開する、④攻撃中心である宮下選手が優秀選手に選ばれ、大きく成長したことなど、多くの成果をあげることができました。しかしながら、多くの反省点もありましたので、オリンピック予選までの残された日程でこれらを修正するとともに、日本チームをベストな状態にし、本大会に臨むため、特に次のポイント、に重点を置き、最後の強化策を行ってゆきたいと思います。

①連続攻撃の完成。
・フローター陣の攻撃からのボール展開力のアップ。
・サイドプレーヤーの相手ディフェンスの状態に応じたボール展開力のアップ。
・相手ディフェンスを崩すための縦横の動きのパターン化。

②個人の攻撃能力、技術の高度化による得点力のアップ。
・フローターのロングシュート確率のアップ（ブロックプレーなど）。
・サイドプレーヤーのフェイント力、シュート力のアップ。
・ポストプレーヤーのシュートチャンスのアシストプレーの充実。

③フォロー速攻の戦力アップ。

④相手のリズムの崩壊テクニックの習得。

⑤そつのないハンドボールとスピードハンドボールの完成。

これらの点の徹底強化を図り、宿敵・中国、クウェートを連破し、ミュンヘン・オリンピック大会以来、5回目のオリンピック出場権を獲得すべく、チーム一丸となって全力を投球してゆきたい。

ジャパンカップの成果を基にめざせ
オリンピック出場権

# アジア選手権大会　男子代表選手

※生年月日、身長、体重、所属を掲載

ＦＰ　西山　清
1959.4.8　182cm　78kg
日新製鋼

ＧＫ　橋本行弘
1965.9.17　185cm　80kg
本田技研鈴鹿

ＧＫ　矢内　浩
1960.8.1　189cm　85kg
大崎電気

ＧＫ　井藤英忠
1959.3.10　185cm　83kg
湧永製薬

ＦＰ　首藤信一
1965.1.10　186cm　85kg
大崎電気

ＦＰ　荷川取義浩
1961.12.4　185cm　90kg
湧永製薬

ＦＰ　玉村健次
1961.1.16　182cm　78kg
湧永製薬

ＦＰ　山本興道
1960.2.8　183cm　83kg
大崎電気

ＦＰ　田口　隆
1961.7.23　182cm　78kg
本田技研鈴鹿

ＦＰ　立木浩二
1960.4.28　184cm　76kg
本田技研鈴鹿

ＦＰ　高村誠一
1960.12.11　187cm　80kg
大同特殊鋼

ＦＰ　酒巻清治
1962.5.7　180cm　78kg
湧永製薬

ＦＰ　藤井　泉
1959.6.26　181cm　74kg
日新製鋼

ＦＰ　朝生和光
1962.6.21　174cm　70kg
大同特殊鋼

ＦＰ　奥田新治
1959.6.11　184cm　72kg
湧永製薬

ＦＰ　宮下和宏
1961.8.6　187cm　85kg
大崎電気

# ジャパンカップから得たもの

# オリンピック予選突破に向けて

女子日本代表監督　井　薫

ユーゴのイサコビッチや、ソ連のツルチーナが日本のコートでプレイする〝ジャパンカップ〟は、ハンドボールファンにとって待ち望んだイベントであり、強化現場にしても本当に嬉しい催しでした。

それはオリンピック予選に向けて、世界の強豪に勝負を挑み調整をはかれるメリットに併せて、若い人たちが世界のプレイにふれる事で啓発され、競技の裾野が広がるキッカケとなりそうな胸のふくらむ想い、さらに日本の男女ナショナルチームが遠征でお世話になった世界の仲間を日本に招き得た喜びなどが重なりあった気持ちからですが、実際、来日したプレイヤーたちは憧れの日本での大会、そして五月晴れの初夏を満喫してくれたようです。

ユーゴ対西独、ソ連対韓国のスリリングなゲーム、そして日本の女子としては、USAカップで優勝したアメリカを破り、韓国とも最後まで1点を争うゲームが展開出来て、収穫の多い大会でした。

欲をいえば、東京以外でも女子のプレイを多くの人に見て貰いたかった事で、ソ連や韓国のすごいプレイ、アメリカチームの伸びやかな明るさなどきっと日本の若い人たちに感銘を与えたと思います。

いずれにしても、この企画が今年だけのものでなく、毎年行われるよう、協会の意欲を期待したいとおもいます。日本で多くの国際ゲームが行われるようになる事が、メジャー化への第一歩だと思います。

## がんばれ日本！

ただ、そこで問題なのが、今年から施行された新ルールですが、国際ゲームと自分たちが行うゲームでは、ルールが違うというのでは、若い人たちのハートもマスコミの理解もつかむ事は出来ず、不具合は歴然です。メジャー化への国内での施策の第一歩は、IHFルールの再適用にふみ切る事だとおもいます。多くの現場の声としてとらえ、改善への英断もこれを機会にお願いしたいと思います。

8月にヨルダンで行われるアジア選手権大会が、オリンピック予選を兼ねるという。一報は、4月1日の北川強化部長からの電話でした。女子に関しては11月に日本での予選開催に中国も同意の空気を知っていましたので、予選が3ヵ月あまり早くなった事と、オリッピックアジア選手権での・順位を決定する競技方法の難しさ、さらに首都アンマンの治安は問題ないにしても、緊迫する状況下の「イ・イ戦争」、イスラエル、シリアにも隣接する中近東であり、幾つもの不安を抱えて大会に臨む事になりました。

競技方法が納得のいくもので、中国との対戦で決着をつけられる事を願い、想定して強化を続けています。

昨年の世界選手権、中国とは引き分けましたが、これは小池、野嶋の両アタッカーの活躍、そしてGK葛生の確実なキーピングに支えられたもので、このゲームのVTRをその後つぶさに検討した結果、ディフェンスの軽視にとられてはいけませんが、ある程度の出血は覚悟して、点の取り合いのゲーム展開に持ち込むべきではないかと思い、速攻やフリー、そしてセットでの攻め、フリースローや、スローインからも得点可能な部分を洗いなおして、攻撃力のアップを計ることが勝利へのカギではないかとおもいます。

日本のチームリーダー前田、めざせオリンピック出場

その意味で、小池の膝の故障は痛手ですが、山岸、丸田が自覚、随分たくましくなり、野嶋、武藤と併用する事で相乗効果を期待しています。岩村は〝ジャパンカップ〟まで休ませた事で復帰、磯山も韓国戦あたりから、ポストとしての動きを理解しはじめました。左腕の林もセットでの役割りを任せています。そして実は小兵の4人のサイドプレイヤーが大きな戦力になるのではないかとひそかに期待しているのですが、やや浮き気味の中国のディフェンス、ラインに近藤、井沢、中嶋、比嘉が視野外からの走り、守りの裏を突くような、各々持ち味が発揮できれば、崩せると思います。それは、これまでの国際ゲームでも先輩たちにより実証されている事でもあります。

〝ジャパンカップ〟日本チームのMVP前田の切れ味も変わりませんし、チームリーダーとして岩村と一緒に、オリンピック出場をかける大一番に、リーダーシップを発揮、良い形でチームを盛り上げてくれると思います。

7月の韓国遠征が先方の事情で断られ、最後の強化予定に狂いが生じましたが、国内での強化をすすめ、皆んなで力を会わせて、男女で、オリンピック出場の夢を果たしたいと思います。

# アジア選手権大会　女子代表選手

※生年月日、身長、体重、所属を掲載

ＦＰ　前田重子
1962.3.11　163cm　58kg
日立栃木

ＧＫ　村山みどり
1969.1.9　163cm　65kg
東京女子体育大学

ＧＫ　小深田由紀子
1966.1.4　172cm　62kg
ジャスコ

ＧＫ　葛生豊子
1962.5.25　167cm　61kg
日立栃木

ＦＰ　近藤育子
1965.3.15　160cm　62kg
ジャスコ

ＦＰ　武藤夕起子
1964.3.26　169cm　65kg
日本ビクター

ＦＰ　山岸和子
1963.9.9　173cm　66kg
日立栃木

ＦＰ　井沢由美子
1965.3.2　158cm　56kg
日立栃木

ＦＰ　丸田紀子
1965.9.15　171cm　62kg
大和銀行

ＦＰ　野嶋ちえみ
1964.4.10　166cm　60kg
立石電機山鹿

ＦＰ　岩村英子
1962.1.2　173cm　65kg
立石電機山鹿

ＦＰ　小池宏子
1962.7.17　170cm　65kg
ブラザー工業

ＦＰ　比嘉晴美
1969.9.12　162cm　48kg
具志川高校

ＦＰ　林　智恵
1968.5.11　173cm　65kg
筑波大学

ＦＰ　磯山弘美
1967.10.3　170cm　65kg
筑波大学

ＦＰ　中嶋恵美子
1965.7.1　152cm　52kg
筑波大学

# 第10回世界学生選手権大会報告

**前号で、第10回世界学生選手権大会の結果についてはお伝えしましたが、今月は、参加した監督、選手の報告文の一部を掲載させていただきます。**

大西　武三

今回の遠征の目的は、予選リーグにおいてアメリカ、イスラエルに勝ち、ベスト8に入ることがすべてであった。しかしアメリカに勝ちながら、下位ランクのイスラエルに負け、アメリカ・イスラエル・日本が同率となり得失点差で予選リーグ最下位となり、辛酸をなめさせられることとなった。救いと言えば、大会参加以来初めて3勝を得たことであった。

**一、大会参加の準備は現段階で最高の準備であった。**

職業をもつ役員、学生の身分である選手にこれ以上の時間的、経済的負担を強いることは困難ではないだろうか。この2つの障害を解消できる環境ができればもっと出来ると思われるが。

①六一年七月より短期の合宿5回、国際試合13回（六一年七月1回、二月7回大会直前5回）

②メンバー構成は、卒業生の核になれる2人の人材を入れ現時点では最高のメンバー。

③戦術もかなり納得いくまででき上がり、特にディフェンスもプレス的に守れるようになり、試合運びも安定していた。

**二、アメリカ戦に勝てたのは。**

①日本の良い面がすべてでた。精神的にも非常に充実していた。

②前日のソ連戦に、作戦的なこともあって休ませていた橋本が当たったこと。

**三、イスラエル戦に負けたのは。**

①ソ連、アメリカ戦で体力を消耗しすぎた。2戦とも主力選手にほとんど交代がなく、3戦目には疲れ果てていた。身長、体重差をはね返すことは、言わば1試合中相撲を取っているに等しい感を受ける。時間の経過とともに体力が落ち集中力が劣ってくる。このことは、いつも言われていることであるが、大会を経験するごとに、益々この差を明確に持つようになっている。

この試合に関しては、2試合の体力の消耗のためか、試合前の練習の時から元気がなく集中力に欠けていた。

②情報の漏れ？

日本がビデオを撮っていたことや午前の対イスラエル戦のフォーメーション対策の練習がイスラエルに漏れていたようである。イスラエルはこの試合だけ布陣を変え、軸としているフォーメーションを使ってこなかった。

③戦術的なまとまりはイスラエルが上か？

身長差は日本とほぼ互角であったが、体重は日本より上であった。個々の破壊力はそれほどでもなかったが、ボールキープ力が抜群で試合運びが上手であり、まとまってよく練習をしているように思われた。

④1勝を得ようとするイスラエルとアメリカに勝ってほっとする日本。

選手はほっとしていたとは言わないかもしれないが、本当に心底勝ちたい、勝たねばならないという気持ちは大会に何回か参加し、上位に残る喜びや、負けて下位にまわる屈辱を味わう中で出来て来るものだと思われる。山村以下2名を除いて初めての参加である。ほっとするのもやむをえないか。

今後の大会では、主力は2度目の大会参加であるようにする。

**四、所詮日本はにわかづくりのチーム。**

形態、体力で劣る日本のチームが国際試合で勝つためには、完成品のチームにしなければならない。今回のチームは、現時点では最高の努力をしたと思う。これ以上の犠牲を選手、役員、関係者に果たすことが出来るであろうか。完成品のチームにするためには、1年に二〇〇日も三〇〇日も練習することが必要である。その点から見れば、努力はしたといっても所詮、にわかづくりのチームにすぎない。勝てるチームを国際試合に送るためには発想の転換をしなけ

ればならない。ドイツも悪いチームではなかったが、日本が勝てたのは、ドイツのほうがよりひどい、にわかづくりのチームに他ならないからであった。

**五、参加チームの実力は下位の方が非常に上がっている。**

フランスや西ドイツの大会では、下位のチームをみたとき、はっきりと日本チームが上というチームがあったが、今回はそのようなチームが見当たらず下位のレベルアップが明確になった。

**六、ビデオは役に立つ。**

今回初めてビデオを持っていったが、情報収集に大変役立った。ただ選手に対する見せかたには注意する必要がある。滞同審判員との連携でより多くの情報が収集出来る。

**七、今後、日本は、どういう目的で参加するか。**

① 1位から6位以内
今までのやりかたでは、不可能。

② 7、8位
予選リーグで2位に入らなければならない。今までのやりかたに手を加え、そして幸運を待つ。

③ 今までのやりかたで順位は9位から16位であろうが、大会に参加する意義やその他のメリットを狙って参加する。
1、日本の学生レベルの確認（国内的、国際的）
2、役員、選手のレベルアップのための刺激
3、国際交流。

**早大・甲斐　章義**

今回の大会では、8位以内という目標をスタッフと選手で打ち立ててルーマニアに旅立ちました。そのためには、まず決勝リーグに残ることでした。

予選リーグは、ソビエト、アメリカ、イスラエルと対戦、ソビエト戦では、後半に3点差まで詰め寄ったが、最終的にダブルスコアーぐらいに離されました。この試合は、力の差は歴然としていたが、8位以内という目標に対してみんなが意欲的だった。問題は、2、3戦目だった。前大会では、アメリカに敗れ決勝リーグに参加できなかった。それで今回は、国内合宿から海外遠征合宿を通して、アメリカ戦を想定して行ってきた。アメリカ戦がすべてという気持ちで戦ってきました。結果、アメリカに勝つことは出来ましたが、今大会は、イスラエル戦がすべてだったと言えると思います。イスラエルが、アメリカに負け、日本に勝ったことによって、決勝リーグはアメリカ、そして、ソビエトが参加することになった。日本は、下位リーグへ行ったのですが、下位リーグでもやはり苦しい戦いが続き、一つでも上の順位をと奮起したのですが、その結果は13位だった。

今大会、悔いが残ったのは確かなのだが、しかし、今まで行ってきた合宿や遠征までも無駄な時間だったのだろうかと考えて見ると、決して無駄ではないように自分は思う。それは、8位以内という目標で、高いレベルで今までトレーニングを積んできた。そのことが、これからの試合で必ず生かせると思うからである。国内で自分自身が明らかにする問題だと思う。

今大会を通じて、世界で一つでも多く勝つということの苦しさ、難しさを痛感したが、決して、日本は上位に食い込む力がなかったとは、思えない。

**京都教員・楠本　繁生**

世界大会、私にとって初めての経験でもあり、最後のチャンス。これまでやってきたハンドボールが果たして世界の舞台でどこまでやれるか、気持ちは複雑でしたが、またとない絶好の機会、自分の力以上のものが出せればと思いました。

私たちは、この大会に向けてまず開催地（ルーマニア）へ2月遠征合宿という、これまでに例を見ない力の入れようで、スタッフを始め選手一同この大会に賭ける意気込みが強く感じられました。遠征において、なんと言っても日本人とは違う高さ、パワーなど体格差を肌で感じ取り、それにどう守り、どう攻撃していくか、また私生活においても食べ物、飲涼水を始め生活習慣など全く違う中で自分自身の体調をいかにベストにしていけるかなど、学ぶべき所が多くいい経験となり、チームとしても集団生活の中で一つになったように思いました。

大会前に練習試合を5つ組み、もう一度外国人対策を再確認し、いよいよ本大会予選リーグ第1戦の対ソ連戦。まるで大人と子供のような体格差、結果は30－16で敗れたものの次につなげられる試合内容だったと思います。

対アメリカ、もちろん体格差など言うまでもありませんが、そんなことはものともせずスタッフ、選手一同外国人には見られない集結した日本人の力を見せつけた試合でした。予選最後の試合対イスラエル、これに勝てば上位リーグ、負ければと大きな分れ目となる一戦。肉体的疲れか、精神的甘さか、私たちは、昨日とはうってかわったゲーム内容で、結局自分たちのプレーを出し切れぬままゲームセ

ットの笛が場内を響きわたった瞬間、私たちの目の前は真暗に……。今考えても悔やむこの一試合。これまで悔しい思いは数多くしてきたが、このゲームは一生忘れることができないだろう。また、それと同時に勝敗の恐しさをあらためて痛感させられました。結果は13位と、当初の目標は達成できず、応援して下さった人たちたくさんの激励の言葉をかけて下さった人たちには本当に申し訳なく思っています。自分自身、これからも日本でできる限りハンドボールを続けていく中で、この大会で吸収し得たものを今後生かしステップとし頑張っていきたいものです。

最後に、この大会で感じたことは、やはり世界の舞台で本当に勝負をするなら、もっと長い時間の練習量をついやし、一つのチームに固めて勝負にいけばと、しかしなかなかそうはいかないことは私自身もよくわかっているのですが……。やはり今のこの体格では世界の上位にくい込むのも大変むずかしいことではないだろうか。

### 日体大・斉藤慎太郎

自分は、前回の9回大会に引き続き2回目の出場だったわけですが、今大会は組み合わせにも恵まれており、アメリカ、イスラエル、ソ連といったグループでした。アメリカとは前回僅差で敗れているだけに、ちょうどよい雪辱戦ということで、選手全員がアメリカに勝ち準決勝リーグへ進むことを目標において試合へ臨みました。しかし結果は、アメリカには勝てたのですが、イスラエルに敗れるという予想外の結果になってしまいました。

今回も前回と同様に徹底したディフェンスをという意識のもとでゲームを行っていったわけですが、実際は、この大会前の2月に事前合宿でルーマニアに来た時よりも守りの確実性や連携の面において力が十分に発揮できなかったように思いました。

いざゲームになると、さすがに世界のトップクラスのチームは、日本人とはいろいろな面において格段の力の差がありました。ですが、我々のような体格の者でも、大きい外人に対して、タイミングよく前へつめ、そして相手に苦しい形でプレーさせることができればなんとか守れるということも、今回の経験で分かりました。

しかし、良い形のディフェンスで成功した日の次の日の相手チームに対しては、ディフェンスが非常に悪くなったりするなどして、タイプが違う相手への対応の悪さや、ディフェンスからの速攻に対する動きがなかったことも反省するべき点として残りました。

そして、我々の一番悔しいゲームであったイスラエル戦やオーストラリア戦のような、力の差があまり感じられない相手に対してチャンスを生かしきれず負けたということは、「勝たなければいけない」という、試合に対する意欲など精神面の強化が足りなかったせいもあったと思います。

これから世界の上位に立ち向かっていくためには、こういった少ないチャンスを生かし、日本チームの個性を生かした技術の開発をしていきながら、外国のチームとの試合などで多くの経験を積むことが必要だと痛感しました。

### 日体大・長沢純平

今回の大会は、本大会を前に2月にルーマニア遠征を行ったこともあり、目標も6位以内と大きく持ち、本大会に出場しました。

予選リーグは、ソ連、米国、イスラエル、日本の4チームで、ここでソ連に次いで2位に食い込んで準決勝リーグへ進出、という目標であったが、結果は1勝2敗、得失点差で下位リーグに落ち、結局13位という成績でした。この予選リーグでの1勝は、米国との試合での1勝で、体格、パワーでは絶対に米国の方が上でしたが、合宿時からみんな積極的にトレーニングを行い、「米国とは絶対に勝つんだ」というみんなの気持ちが、米国戦の勝利につながったと思います。

この大会で、我が日本のチームの順位を大きく左右したのが、予選リーグ3戦目のイスラエル戦でした。イスラエルの選手は一番背の高い人で1m85cmか86cmぐらいで、平均約1m75cmぐらいに見えました。なぜイスラエルが強かったのか。考えてみると、まずフローターがしっかりしていること。ディフェンスはワントップディフェンスで、積極的であり、ゴールキーパーも安定していること。総合的に見て、どのようなチームに対しても自分たちのペースでプレーを行っていること、があげられると思う。我がチームは、このイスラエルと試合を行い、終始イスラエルペースで自分たちの力を60%も出せず敗れていまいました。この試合を終えて、小さい体でもスピード、またはブラインド、クイックなどのテクニックシュートで、大きな人間に対して十分戦えるということを知りました。また、自分らが今回行ったワントップディフェンスからのプレスディフェンスは、十分外国のチームに通用することを知りました。

最後に、今回の遠征を終えて、自分は世界各国のハンドボールとはどういうものかを勉強し、より深くハンドボールを知ることが出来ました。また、自分にとって貴重な遠征でしたし、一生思い出となる遠征になると思います。

5月30日から6月6日まで行われた“ジャパンカップ”では、多くの中・高校生の諸君が観戦、大きな感動を受けました。編集委員会では、いくかつの学校の先生にお願いして、生徒諸君に感想文を書いてもらい、その一部をここに掲載させていただきました。各地でこうした感想がございましたらどしどしお寄せ下さい。

# ジャパンカップを観て

## 藤村女子高・澤潟有紀

顧問の先生から「ジャパンカップはオリンピックに負けない試合だ」と聞き、5月30日に胸をはずませて代々木第一体育館に足を踏み入れました。

その日は、ソ連チームと日本チームの試合が行われ、私はただ体格の良いソ連選手に圧倒されてしまいました。あまりの迫力に、なんとなく別の競技を見ているような錯覚させ覚えました。

次の日の31日は、ソ連チームと韓国チームの試合が行われる日でした。私たちの学校では、去年、今年の二度、韓国の昌文女子高校と交歓交流試合をしているということもあり、韓国のハンドボール技術のすばらしさを知っていました。しかし、それは同年代の高校生のプレイに限られていましたので、高校生の上をいく人たちがどんなプレイをするのか楽しみでした。また、韓国チームと日本チームがほとんど同じ体格なので、ソ連チームの長身の選手たちに、韓国チームも苦戦するのではないかとも思っていました。しかし、スローオフの笛が鳴った瞬間から、韓国チームのスピーディな動き、高いジャンプからクイックでゴールのコーナーにびしっときめるロングシュートや、角度のほとんどない位置からきめるサイドシュートなど、ため息が出るようなプレイばかりでした。このような感動を得られたのも、実際に自分の目で試合を見たからだと思います。

韓国チームのハンドボールを見て、更にその魅力を知りました。これからも、韓国をはじめ、世界各国のハンドボールを見て、色々学びたいと思います。

## 藤村女子高・中村尚子

5月30日から6月6日まで、世界の強豪チームが集まり、世界チャンピオンを争う試合が行われました。その中で、私の一番心に残っている試合は、女子のソ連対韓国の試合でした。

ソ連チームは、41歳のベテラン、ツルチーナ選手をはじめ、ゴールがたたき壊されてしまいそうな力強いシュートを打つ、長身で迫力のある選手ばかりでした。ソ連の選手に比べ、韓国の選手は身長は低いのですが、金賢美選手などの、ソ連の厚いディフェンスの壁を越えて打つジャンプシュートは、私の心に強く焼きついています。

試合開始後すぐに、ソ連の選手がステップシュートに見せかけて打ったジャンプシュートがゴールの中へ飛び込んでいきました。その巧みなプレイに場内は騒然となりました。韓国の選手もそれに負けず、ロングシュート、速攻など多彩なプレイを見せ、最後まで目の離せない緊張感のある試合でした。

結果は、ソ連が世界チャンピオンの強さを見せて勝ちましたが、韓国チームがソ連に食い付いていく姿は、忘れることができません。

もう一つ私が印象に残っていることは、ウォーミングアップの仕方でした。私も練習や試合前などに軽くウォーミングアップを行います。しかし、どこの国の選手のそれを見ても、慎重に、長い時間をかけて体をならしていき、パスキャッチも、天井につきそうな位高く上げたり、ボールを自由自在に扱っていて、ウォーミングアップの重要さを知りました。

ジャパンカップが行われたことにより、更に多くの日本の人々が「ハンドボール」に対する関心を深め、おもしろさや、むずかしさを知ることができたのではないかと思います。

## 拓大一高・森田　彰

今回のこのジャパンカップは、今後のハンドボール界において、大きな成果があったような気がした。それは、まず、世界のハンドボールを見て、「追いつき追いこせ」という目標がおけたこと、もう一つは、世界のプレーを見れて、「あ〜、こんなようなシュートがあるのか。」と技術的にUPするようなことができた。それが、ぼくが見て、全体的(チーム)としておおざっぱに思ったことです。

男子の2試合と女子4試合見たけれども、やはり、男子では、ユーゴ対西ドイツ、女子では、ソ連対韓国の試合が、すごく印象的だった。あのイサコビッチの個人技は特にすばらしかった。それはみんな思っていたことだと思うが(これも)、一番のポストの位置取りがすご〜くうまく、これまた、シュートも天下一品だったと思う。ディフェンスが向こうに寄った時にはもう『かち』の位置をとっている。

たとえ、横や後ろから押されたとしても、びくともしないし、必要な時には、カミソリのごとくスパッと動く。ぼくは、これからポストをやっていきたいと思うが、あれくらいうまくなりたいと心の中でひそかに思った。

また、シュートは格別うまかったと思う。それは、ボールが手に触れるか触れないかのうちにもう後ろへ回りはじめていて、倒れ込んでいて手を振れば95%近くシュートが入る。「それほど、うまいポストプレイをしてみたい」と思った。今後は、日本のプレーヤーにも、そういう選手が必要だと思うぼくでした。

女子の試合では、ソ連のツルチーナのあのしっかりした、パスの正確さにとっても驚いた。右45度のロングシューターをうまくリー

ドして、自らもフェイントをかけていくあーいうプレイをできていれば、柳沢をうまくリードして、明星にも勝てたと思う。日本の女子の中にも、うまいプレーヤーはいたが、あまり世界のプレーヤーにかこまれてたのでほとんど目立たなかった。もっと世界でも、目立つプレーヤーが日本の選手の中にもほしいと思った。できれば、その中に入りたいと大きな夢を持っているぼくでした。

**拓大一高・谷中新市**

私は、先日、代々木第一体育館にてこれまでにない異常な興奮を感じた。それというのは、ハンドボールの世界トップレベルのチームの試合を、自分の眼を通して、直接みることができたからだ。そのチームは、日本で開かれた大会、「ジャパンカップ」のために、ユーゴスラビア、西ドイツなどの代表チームとして来日したチームなのである。そのチームの中で世界トップを行っているのが、ユーゴスラビア代表、次に、西ドイツである。だからこの大会で一番のみどころというのが、この両チームの戦いであったし、興奮を覚えたのも、もちろんである。

その試合は、予想通り最初から点差のない激しい試合となりました。試合の内容も濃く、一人一人のプレーが、個性的で、超人的で、高校生の私たちには、信じられないような事ばかりでした。やはり、あのような事ができるのも、発想豊で、心底ハンドボールが好きだからであろう。結局、試合は、世界二位の西ドイツが、ユーゴを破った。しかし、試合は、勝敗とは別に、充実していた。

2日目にユーゴ対日本の試合があったが、日本の完敗だった。前半には、日本も、ユーゴにくっついて目をみはるプレーもあまああったが、後半あたりで、日本のシュートミス、パスミスが出始め、それとは逆に、ユーゴの好プレーが目立つようになり、点差がそこから開き、負けたのである。

この試合を私の目から見て、ユーゴは日本に持ってないものをもっていたような気がする。それは、外国人ならではの発想のすばさし、色々な事を、ハンドボールに取り入れる事など。また、体格の良さ、天性の素質を持っている。日本も近い将来、世界のレベルに追いつく日が来るといいなあ。

**拓大一高・加藤亜紀子**

ジャパンカップを見る前に先生に、「ただ『すごい』と思うだけじゃなく……」と言われたけれど、一番始めに見て思ったことは、やっぱり〝すごい〟ということだった。

背はでかいし、まるでボールは手の一部のように扱い、戦車のごとくどっしりとかまえている。

きっとあんな外人に、ディフェンスされたら、銃で狙われた動物のように、身動きがとれてくなってしまいそうな迫力である。

けれど韓国の人たちは、小柄なわりに、スピードあふれる、プレイを見せてくれた。足は速いし、ボールまわしは早いし、小さなプレイが正確である。それに対してアメリカなどの大柄な人が集まるチームは、パワフルで、プレイが大きい。大柄チームと小柄チームがやっている時でも、それぞれの特徴を生かしてがんばっていた。

決して小柄チームが迫力負けするとか、そんなことはぜんぜんなくて、がんばっているなと思う。

まだ、日本の女子は、レベルが低いけれども、決して大柄チームに迫力で負けてほしくない。韓国のように小柄でも、がんばっているチームがいるんだし……。

もっともっと活躍して世界のハンドボールに貢献してほしい。

そして、我拓大一高のハンドボール部も、決して誰かがずばぬけてうまい人とかがいるわけでもない。そして経験者がそろっているわけでもないチームなので、大柄チーム小柄チームのように、自分たちの長所を最大に生かし、自分たちの短所は、お互いにカバーしあい、試合の時は、短所が最小限におさえらさるように見習いたい。

そして、いい意味での自分たちのハンドボールを、拓大一高の独特の個性的なハンドボールというものを築き上げてゆくのに、ジャパンカップは大いに参考になったと思う。

最後に、やっぱり外国人は〝すごい〟

**拓大一高・篠宮　栄**

私は、このジャパンカップを観戦する前はビデオしか見れませんでしたが、改めて見るとプレイの速さ、ダイナミックさには、本当に驚くばかりで、私などは足もとにも及ばないということを分からされたという感じでした。その中でも特にチェックをしたのは、各国のサイドプレーヤーのフェイントのかけ方やシュートの工夫、位置どりなどを中心に見ていきました。

いろいろな選手を見ていると、その中でユーゴスラビアのイサコビッチが特に光っていて、他国のサイドプレーヤーとは、一枚も二枚も上手であるということを証明するようなプレーたとえば逆スピンやよくきれるフェイントをよく出し観客をわかせていました。

私は、このジャパンカップで観たことを勉強し、練習や試合で取り入れようとしましたが、考えが甘く、脚力や投力といった基本的なことから雲泥の差があり、あま

り成果が上がったとはいえませんでした。
　これからは、基本を忠実にしっかりかためて、高度なプレイをできるよう心がけていきたいと思います。

## 中大付属高・瀧澤哲成

近年、外国チームを日本に招待して国際的スポーツ大会を開くことが、あらゆる競技に渡り流行っている。ジャパンカップもそれらの一つであろう。国際大会を開くことは、スポンサーとなる企業の大きな宣伝効果となると共に、レベルの高い外国チームのプレイを見ることによってその国全体のレベルアップが計られる。
　しかし、その多くの国際大会が立派なネーミングがつけられているのに中味が少ない。ジャパンカップはそうではなかった。ロス五輪の1位、2位のチームがそろって出場していることだけでもその大会のレベルの高さがわかるというものだ。
　5月31日の日本対ユーゴスラビアの試合は、点差が大きく離れたものの、世界一のそのプレイに多いに驚かされた。前日の対西ドイツ戦に見せたバックシュートと、イサコビッチのプレーを楽しみにしていた。そして、日本に「神風」が吹き、あわよくば勝つことを期待して会場に入った。
日本のパスミスで始まったが、両者の間に「神風」が吹くことはなかった。ユーゴのプレーヤー一人一人が素晴らしかったが、私が最も驚かされたのは、この試合7得点をあげたモミル・ルニッチであった。
　ルニッチにボールが渡る。ポストプレーヤーである彼に日本のディフェンスが3人もつくのだが、彼はそれらを引きずってポストシュートを打つ。あのパワープレーを見たとき、ハンドボールが格闘技であることを確信した。
　ポストにいるルニッチにボールが渡れば1点となってしまう。当然彼に対するマークを厚くする。すると今度は、マークの薄くなったフローターが豪外にロングシュートを放つ。そうなると、ディフェンスは成すすべが無くなる。
　受け身的なプレイの多いポストの活躍によって、フローター、サイドのプレイがよりしやすくなる。フローター、サイドが得点を決めれば今度はポストが開いてくる。という攻撃は基本なのであろうが、それはまた攻撃の理想なのではないかと思われた。
　高校からハンドボールを始めて間も無い私が大きなことを言ってしまったが、それが第一の感想である。
　そして、多くの人々がルニッチの、イサコビッチの、宮下のファンとなった。この試合の数週間後に開かれる東京都インターハイ予選においてかなりの人が、イサコビッチのスピンシュートを真似ていた。自分の好きな選手のプレイを試合に使うことができたとしたら、こんなうれしいことはない。

## 桜木中学・槇　重人

　6月2日、代々木の体育館で行われたハンドボールの「ジャパンカップ」を見に行ったときのことです。
　最初に僕が見た試合は、女子の日本対韓国でした。試合前に両チームの練習を見ていると、体格や顔、シュートフォームもよく似ていると思いました。その試合につき、日本も韓国も身長や力がある方ではないので、速攻やコンビネーションプレイに見どころがあるのではないか、などと考えていました。
　試合が始まり、まず気がついたことはディフェンスの声です。一人一人の選手が、自分のマークする人をはっきりさせるだけでなく、他の人にも指示を出し、常に声がとまらなかったことです。それによって自分の気が抜けないように気をつけているようにも感じました。次に、速攻の時にフォローに入る位置やパスを出してから、またもらいに走るなど、スピードの中にも正確さが必要だということを感じました。日本チームも、速攻やポストプレー、カットインなどで得点を重ねていきましたが、実力に勝る韓国の勝利に終わりました。女子とはいえ、迫力があり、観客を圧倒する場面が何度も見られました。
　その次に行われた試合は、男子の日本対西ドイツです。西ドイツは、世界のトップチームとあって、身長が2m以上の選手もいました。この試合では、パワーやテクニックなどすべての面で世界のトップクラスの西ドイツに、日本が機動力をどれだけ発揮できるか、などが面白い所ではないか、と思いました。
　試合の展開は、一方的なゲームではなく、途中まではせり合っていました。そこで気がついたことは、せり合ったゲームの時、日本の選手は、点が入れば喜び、入れられれば悔やしがりますが、西ドイツの選手には見ていてそうゆうことは感じられませんでした。その事について、西ドイツの人は、もともとそうゆう顔つきなのか、あるいは相手につけいるすきを与えないことや仲間同士が気持ちを引きしめるために、わざと無表情でプレーをする（いわいるポーカーフェイス）ということを演じているのか、それとも、余裕のあまり点差など気にしていないのか、などいろいろ疑問に思いました。
次に、日本の選手は、個人のミス

はみんなでカバーしようという感じでしたが、西ドイツは、自分のミスを自分で消すといとような感じがしました。その他にも、日本より個人のプレーが多かったような感じがしたのも自分の国のために、生活をかけてプレーしているという厳しい面があるからではないかと思いました。西ドイツのプレーヤーを見ていて思ったことは、ジャンプシュートの打点が非常に高いということで、それは、ただ単に背が高いというだけのことではなく、それに加えて並はずれたジャンプ力があるということです。よって空中にいる間にキーパの動きをよく見ることができます。特に、サイドシュートなどでは、そのことがよく表れていました。その他にも、フェイントの速さや強引さには、やはり世界一、二をあらそうチームだと思わせられました。しかし、日本の選手も小柄ながら、スピードや抜群のコントロールで、次々とシュートを決め、持ち味を生かしていました。特にミドルシュートでは、西ドイツの高いブロックをかわして、うまく間からうち、キーパーのとれないゴールの隅へものの見ごとに決まったものが何本かありました。後半の最後には日本がスカイプレーを試みましたが、失敗してしまいました。僕は、スカイプレーが出ることを期待してたので残念でした。しかし、そのプレーをよんで防いだ西ドイツもさすがだと思いました。

結局、日本も必死になって食い下がりましたが、後半の最後で点差がひらいて負けてしまい、「世界の壁」というものの厚さを感じました。しかし、勝敗は別として、日本のトップと世界のトップの試合を実際に見ることができ、とても良い経験になりました。

## 桜木中学・清水　愛

私は、桜木中学校に入学して、初めてハンドボールというスポーツを知りました。最初陸上をやろうと思っていた私には、全く興味がなかったけれど、友達にさそわれてハンドボール部に入部しました。

毎日、毎日がつらく、苦しい練習の連続でした。何度も、もうやめたい！と思いました。しかし、その練習の成果が、試合で得点となり、勝利へと結びつく喜びを知ったとき、私はハンドボールに夢中になってしまいました。

だから、先生に、

「ジャパンカップを見に行こう」

といわれたときから〝5月30日〟この日を楽しみにしていました。（外国のトップレベルのチームがたくさん来るんだ。いったいどんなプレーをするのかな。どこのチームが一番強いんだろう）などと、もうワクワクのしっぱなしでした。

当日、チームメイトと一緒に会場に入ったとき、最初に目に入ったのは、外国選手が練習しているところでした。（わあ、大きいなあ。強そう……。こんな大きな人たちに対して、日本チームはどういうプレイをするのかな。どうすれば勝てるんだろう）と不安と期待でいっぱいになりました。

しかし、試合が始まると、もう不安はいっぺんで吹き飛びました。

力強さ、一人一人のプレーやテクニック、チームワーク、そしてみなぎる闘志、どれもソ連チームに負けていませんでした。

あの、背の高いソ連の選手の上からシュートを打ったり、ディフエンスの間をトップスピードでカットインしたり、一生懸命走って速攻を出したり……。

選手全員から、「勝つぞ!!」という気持ちがひしひしと伝わってきました。

試合は、全日本チームが負けてしまったけれど、見終わった後、すごくすがすがしく、さっぱりとした、とてもいい気分になりました。

私たちのチームも、他のチームに比べると、背が低い人ばかりです。そのため、他のチームの人たちを前にすると、やっぱり（こわいなあ。この人たちの上からシュートを打って、入るかなあ）などと、逃げ腰になり、精神的に負けそうになってしまいます。

でも、この試合を見てからは、今までとはまったく逆の考え方になりました。相手のチームの人たちがいくら高くても、強そうでも、私たちには私たちの戦い方があるし、それにどんな相手でも、一生懸命プレイをして、自分から向かっていく闘志さえあれば、絶対に勝てると思えるようになりました。

私のポジションはサイドなので、観戦したすべての試合の中でも、サイドの選手を中心に見ていました。そのサイドのプレーだけでも、たくさんいいプレーがありました。

私だったら、すぐにひっかかってしまいそうなフェイントプレイや、45度やセンターとうまくあわせてシュートを打たせたり、回っていきながらパスと見せかけて、カットインやディフェンスの上からジャンプシュートをしたり、速攻のときクロスしてうまく相手を引きつけたりなど、どれもすばらしいプレーばかりでした。

その他、ペナルティシュートのとき、一回転して打ったり、パスを回わすふりをして、後ろ向きでポストへパスしたりして、私たちを楽しませてくれました。

ジャパンカップを見にいったおかげで、色々な選手の人たちのプレーがすごく参考になって、とても勉強になりました。

# 各地の記録から・・・

## 東北

### 第40回青森県高校総体

(6月13～15日／野辺地町)

〈男子〉

▼1回戦

青森商 35－13 柏木農
七戸 24－9 弘前南
三本木 31－14 鰺ヶ沢
青森 36－8 野辺地工
青森南 40－28 野辺地横浜
今別 30－15 十和田工
青森東 35－11 青森山田
野辺地 34－12 五所川原

▼2回戦

青森商 27－5 七戸
青森 17－13 三本木
今別 35－20 青森南
野辺地 32－15 青森東

▼準決勝

青森商 26－15 青森
野辺地 32－13 今別

▼決勝

青森商 18 (8－7、10－8) 15 野辺地

※青森商は2年ぶり10回目の優勝

〈女子〉

▼一回戦

青森西 59－0 七戸
青森東 15－5 三本木
野辺地 21－15 青森中央
青森商 33－4 今別

▼準決勝

青森西 40－8 青森東
野辺地 23－19 青森商

▼決勝

青森西 20 (9－3、11－5) 8 野辺地

※青森西は18年連続優勝。

### 第10回東北クラブ選手権

(6月20、21日／青森・七戸町立体育館)

〈男子〉

▼1回戦

白亜ク(岩手) 36－15 ピーターパン(宮城)

▼2回戦

白亜ク 34－16 湯沢ク(秋田)
七戸ユニオン(青森) 27－20 山形ク(山形)
花巻ク(岩手) 36－18 新庄ク(山形)
野辺地ク(青森) 27－22 東北学院大OB(宮城)

▼準決勝

湯沢ク 21－20 七戸ユニオン
花巻ク 27－24 野辺地ク

▼決勝

花巻ク 27 (12－7、15－8) 15 湯沢ク

〈女子〉

▼リーグ戦

あすなろク 24 (13－8、11－3) 11 聖和ク
野辺地ク 24 (11－7、13－6) 13 聖和ク
野辺地ク 18 (9－8、9－9) 17 あすなろク

〔順位〕①野辺地ク②あすなろク③聖和ク

## 関東

### 第5回千葉県クラブ春季リーグ戦

(5月24、31日／場所不明)

▼1部リーグ

小金ク 32－16 清水ク
小金ク 21－13 佐原ク
小金ク 41－24 流山中央ク
小金ク 22－18 市川FOG
市川FOG 27－18 佐原ク
市川FOG 32－17 流山中央ク
市川FOG 33－21 清水ク
佐原ク 25－21 流山中央ク
佐原ク 27－18 清水ク
流山中央ク 22－18 清水ク

〔順位〕①小金ク②市川FOG③佐原ク④流山中央ク⑤清水ク※清水クは秋季リーグより2部。

▼2部リーグ

千葉南ク 30－17 市原ク
千葉南ク 35－16 スティーラーズ
千葉南ク 21－21 あさひク
千葉南ク 17－11 道野辺ク
あさひク 22－20 市原ク
あさひク 19－12 道野辺ク
あさひク 37－15 スティーラーズ
道野辺ク 23－15 スティーラーズ
道野辺ク 24－18 市原ク
市原ク 12－0 スティーラーズ

〔順位〕①千葉南ク②あさひク③道野辺ク④市原ク⑤スティーラーズ※千葉南クは秋季リーグより1部に昇格、スティーラーズは3部に降格。

▼3部リーグ

浦安ク 15－14 若松ク
浦安ク 12－0 ポルシェク
若松ク 19－47 ポルシェク
若松ク 26－24 市松ク
ポルシェク 29－28 市松ク
市松ク 36－15 浦安ク

〔順位〕①浦安ク②若松ク③ポルシェク④市松ク※浦安クは秋季リーグより2部に昇格。

### 千葉県高校総体ブロック予選

(日程、場所不明)

〈第1ブロック〉

○A組

拓大紅陵 23－13 鶴舞商
拓大紅陵 21－20 木更津
木更津 31－9 鶴舞商

○B組

房総学園 13－12 市原
房総学園 21－14 京葉
京葉 21－14 市原

▼5位決定戦

鶴舞商 20—18 市原
▼3位決定戦
木更津 45—14 京葉
▼決勝
拓大紅陵 21—15 房総学園

〈第2ブロック〉
▼リーグ戦
八千代 32—8 秀明八千代
東京学館 29—10 秀明八千代
東京学館 41—10 四街道
八千代 47—3 四街道
八千代 27—16 佐原
佐原 41—6 秀明八千代
秀明八千代 28—22 四街道
八千代 34—15 東京学館
東京学館 24—14 佐原
佐原 40—8 四街道
〔順位〕①八千代②東京学館③佐原④秀明八千代⑤四街道

〈第3ブロック〉
○Aブロック
若松 23—12 泉
泉 31—16 生浜
若松 30—10 生浜
○Bブロック
士気 14—13 千葉南
千葉南 22—9 大宮
士気 25—8 大宮
▼順位決定戦
若松 16—7 士気
泉 27—16 大宮
千葉南 21—18 生浜
〔順位〕①若松②士気③千葉南④泉⑤生浜

〈第4ブロック〉
○Aブロック
東邦 28—5 幕張北
船橋西 14—4 渋谷幕張
東邦 46—6 渋谷幕張
幕張北 8—8 船橋西
東邦 34—4 船橋西
幕張北 14—13 渋谷幕張
○Bブロック
船橋旭 19—1 法典
鎌ケ谷 15—9 船橋東
船橋旭 27—12 鎌ケ谷
船橋東 19—16 法典
船橋旭 33—7 船橋東
鎌ケ谷 25—4 法典
▼順位決定戦
東邦 18—8 船橋旭
鎌ケ谷 10—5 船橋西
▼代表決定戦
船橋東 18—12 幕張北
〔順位〕①東邦②船橋旭③鎌ケ谷④船橋西⑤船橋東

〈第5ブロック〉
二松沼南 29—9 沼南
我孫子 26—22 沼南高柳
二松沼南 34—14 沼南高柳
我孫子 23—20 柏
二松沼南 35—7 柏
柏 33—15 沼南
二松沼南 35—9 我孫子
柏 17—17 沼南高柳
我孫子 19—16 沼南
沼南高柳 22—16 沼南
〔順位〕①二松沼南②我孫子③柏④沼南高柳⑤沼南

〈第6ブロック〉
流山中央 25—10 柏陵
東葛飾 33—8 流山東
流山中央 30—14 東葛飾
芝浦工 19—13 柏陵
流山中央 26—8 芝浦工
芝浦工 35—12 流山東
流山中央 17—17 柏南
柏南 22—13 柏陵
流山中央 49—8 流山東
柏南 21—11 芝浦工
柏陵 27—16 東葛飾
柏南 30—8 流山東
柏陵 44—13 流山東
柏南 25—13 東葛飾
東葛飾 23—13 芝浦工
〔順位〕①流山中央②柏南③柏陵④東葛飾

〈第7ブロック〉
松戸六実 16—12 専大松戸
専大松戸 15—8 国府台
松戸六実 6—6 国府台
専大松戸 22—15 小金
松戸六実 19—12 小金
国府台 11—10 市立松戸
松戸六実 15—13 市立松戸
国府台 19—11 小金
専大松戸 15—15 市立松戸
市立松戸 27—11 小金
〔順位〕①松戸六実②専大松戸③国府台④市立松戸⑤小金

〈第8ブロック〉
市川 44—7 国分
市川 49—6 浦安南
市川 43—0 市川西
市川 25—14 東京学館浦安
東京学館浦安 40—6 国分
東京学館浦安 40—7 浦安南
東京学館浦安 40—9 市川西
国分 19—17 浦安南
国分 13—13 市川西
浦安南 26—12 市川西
〔順位〕①市川②東京学館浦安③国分④浦安南⑤市川西

## 第31回千葉県高校選手権

（6月20、21日／市川市民体育館、昭和学院体育館）

〈男子〉
▼1回戦
市川 23—21 東京学館浦安
二松学舎沼南 32—17 佐原
八千代 29—9 千葉南
東邦 26—10 船橋旭
▼準決勝
市川 23—18 二松学舎沼南
東邦 16—11 八千代
▼決勝
東邦 23（13—4、10—11）15 市川
※東邦は5年ぶり2回目の優勝。

〈女子〉
▼1回戦
昭和学院 48—6 幕張北
流山中央 24—20 佐原女
柏南 21—13 御宿家政
和洋女 23—8 佐原
▼準決勝
昭和学院 35—6 流山中央
和洋女 13—8 柏南
▼決勝
昭和学院 15（8—3、7—2）5 和洋女
※昭和学院は14年連続21回目の優勝。

## 全国高校埼玉県予選

（6月12～15、20～23日／伊奈学園総合高校ほか）

〈男子〉

▼予選トーナメント

○Aブロック

▽1回戦

浦和南 16－13 川口東
三郷北 37－11 熊谷
草加 35－26 桶川
所沢北 27－26 大宮
戸田 27－8 大井
上尾南 25－16 所沢緑ヶ丘

▽2回戦

浦和南 26－11 羽生一
三郷北 32－21 草加
戸田 21－18 所沢北
筑波大坂戸 20－19 上尾南

▽3回戦

浦和南 18－12 三郷北
戸田 22－14 筑波大坂戸

▽4回戦

浦和実 23－11 浦和南
川口青陵 27－10 戸田

▽代表決定戦

浦和実 26－15 川口青陵

○Bブロック

▽1回戦

城北埼玉 28－13 宮代
狭山 24－18 越谷西
埼玉一 16－15 北本
伊奈 30－16 坂戸
西武台 18－16 朝霞
三郷工 21－10 秩父

▽2回戦

城北埼玉 23－16 朝霞西
埼玉一 17－16 狭山
西武台 15－14 伊奈
埼玉栄 35－5 三郷工

▽3回戦

城北埼玉 22－19 埼玉一
埼玉栄 21－18 西武台

▽4回戦

川口工 45－12 城北埼玉
川口北 19－13 埼玉栄

▽代表決定戦

川口工 22－19 川口北

○Cブロック

▽1回戦

上尾東 30－8 和光
小松原 14－13 草加東
春日部 45－17 久喜工
岩槻 53－4 昌平
春日部東 21－6 川越南
秩父農工 33－8 杉戸農

▽2回戦

上尾東 25－14 志木
春日部 23－18 小松原
春日部東 34－20 岩槻
農大三 33－16 秩父農工

▽3回戦

上尾東 24－8 春日部
農大三 12－9 春日部東

▽4回戦

大宮南 26－14 上尾東
城西川越 33－13 農大三

▽代表決定戦

大宮南 23－18 城西川越

○Dブロック

▽1回戦

大宮北 21－15 川口
浦和市立 31－17 富士見
春日部共栄 34－15 浦和工
庄和 32－17 越谷南
春日部工 36－14 西武文理
八潮南 28－14 鴻巣

▽2回戦

大宮北 38－20 科学技術
浦和市立 32－12 春日部共栄
春日部工 22－21 庄和
八潮南 19－13 上尾沼南

▽3回戦

浦和市立 16－12 大宮北
春日部工 35－12 八潮南

▽4回戦

浦和学院 40－10 浦和市立
浦和西 29－18 春日部工

▽代表決定戦

浦和学院 31－17 浦和西

▼決勝リーグ

川口工 15（7－7、8－8）15 大宮南
川口工 21（10－7、11－11）18 浦和学院
川口工 20（12－8、8－10）18 浦和実
大宮南 19（9－9、10－8）17 浦和学院
大宮南 16（8－10、8－6）16 浦和実
浦和学院 23（12－9、11－6）15 浦和実

〔順位〕①川口工②大宮南③浦和学院④浦和実

※川口工は4年ぶり7回目の優勝。

〔総評〕決勝リーグは、浦和実、浦和学院、大宮南、川口工と関東二次予選ベスト4の順当な顔ぶれ。波乱が起こったのはこの決勝リーグである。

初日、浦和実が川口工に18－20と敗れ、浦和学院も大宮南に17－19と敗戦。前大会1位、2位に土がつく大荒れの幕開け。翌日、浦和実は大宮南と16－16の引き分け、残りの対戦相手の関係で夢を絶たれる。浦和学院も川口工のテクニックに屈し2敗。代表決定は最終戦の川口工－大宮南戦に持ち越された。

2勝の川口工は勝ちか引き分けで優勝、1勝1分の大宮南は勝てば初優勝。前半は7－7と互角。後半、大宮南は手渡しパスの応用など絶妙な技を駆使して20分には15－12とリード。しかし、川口工は荻田の3連取で終了間際に同点に追いつき、劇的な幕切れとなった。

川口工は4年ぶりの優勝で、山口新監督の就任に花を添えた。

〈女子〉

▼予選リーグ

○aブロック

▽1回戦

浦和商 15－12 志木

▽2回戦

庄和 33－18 浦和商
八潮 25－4 筑波大坂戸
小松原女 18－10 大宮開成
深谷一 13－10 所沢北

▽3回戦

八潮 23－7 庄和

▽4回戦
小松原女 25—6 深谷一
川口青陵 27—10 八潮
川口北 17—13 小松原女
▽代表決定戦
川口青陵 28—4 川口北

○bブロック
▽1回戦
大宮北 31—10 秩父
浦和学院 17—6 八潮南
▽2回戦
春日部東 13—10 大宮北
草加 11—9 春日部女
春日部共栄 21—7 本庄女
浦和学院 21—10 朝霞
▽3回戦
草加 20—4 春日部東
浦和学院 17—4 春日部共栄
▽4回戦
上尾東 31—3 草加
羽生一 22—7 浦和学院
▽代表決定戦
羽生一 16—14 上尾東

○cブロック
▽1回戦
浦和市立 14—4 越谷南
伊奈 24—6 秋草
▽2回戦
浦和市立 23—5 農大三
草加東 24—10 狭山
伊奈 31—3 大宮南
浦和西 16—13 北本
▽3回戦
浦和市立 12—10 草加東
伊奈 25—10 浦和西
▽4回戦
伊奈 21—8 浦和市立 ※下段参照
三郷北 25—10 浦和市立

---

（※上段最終行の続き）
三郷北 25—10 浦和市立
熊谷女 21—8 伊奈
▽代表決定戦
三郷北 21—11 熊谷女

○dブロック
▽1回戦
行田女 12—8 幸手商
▽2回戦
戸田 8—6 行田女
和光 8—5 草加南
浦和南 29—3 上尾南
川口女 30—3 大宮武蔵野
▽3回戦
和光 13—7 戸田
川口女 12—8 浦和南
▽4回戦
浦和実 32—3 和光
川口女 18—8 川口東
▽代表決定戦
浦和実 28—12 川口女

▼決勝リーグ
川口青陵 20（9—4、11—12）16 浦和実
川口青陵 23（14—6、9—5）11 三郷北
川口青陵 27（13—7、14—3）10 羽生一
浦和実 32（13—5、19—7）12 三郷北
浦和実 32（15—18、17—10）28 羽生一
三郷北 16（9—6、7—7）13 羽生一
〔順位〕①川口青陵②浦和実③三郷北④羽生一
※川口青陵は2年連続2回目の優勝。

〔総評〕決勝リーグは、川口青陵、浦和実、三郷北、羽生一の4チーム。関東二次予選ベスト4の上尾東と羽生一が入れ替わったほかは順当な顔ぶれ。

初日、川口青陵は羽生一を27—10、三郷北を23—11で破り2勝。浦和実も三郷北を32—12、羽生一を32—28と破って2勝。2日目に2勝同士で対戦した。

昨年の1位は川口青陵、一昨年は浦和実。今年はどちらが勝っても2度目のインターハイ。

前半は浦和実のペース。川口青陵のミス、パスカットなどから速攻で走りまくり、12—11とリード。しかし、川口青陵は後半落ち着いて地力を発揮、逆転した後はリードを広げ、20—16で勝利、2度目の優勝を勝ち得た。

浦和実の最後まで粘ったファイトも見事だった。

# 東海

## 全国高校岐阜県予選

（5月24、30、31日／岐阜南高校ほか）

〈男子〉

▼予選トーナメント

○Aブロック
▽1回戦
岐阜東 24—21 大垣農
▽2回戦
県岐阜商 22—15 岐阜東
大垣南 30—20 岐阜工
▽決勝
県岐阜商 27—13 大垣南

○Bブロック
▽1回戦
市岐阜商 30—14 羽島北
▽2回戦
市岐阜商 27—16 加納
大垣工 42—29 高山工
▽決勝
市岐阜商 35—16 大垣工

○Cブロック
▽1回戦
中津 32—15 可児
▽2回戦
岐阜西 22—9 中津
岐山 25—17 郡上
▽決勝
岐阜西 20—13 岐山

▼決勝リーグ
県岐阜商 15（9—5、6—7）12 市岐阜商
県岐阜商 20（10—7、10—4）11 岐阜西
市岐阜商 14（10—5、4—8）13 岐阜西
〔順位〕①県岐阜商②市岐阜商③岐阜西

〈女子〉

▼予選トーナメント

○Aブロック
▽1回戦
県岐阜商 26—1 大垣南
養老女 37—5 可児
▽決勝

県岐阜商 16―11 養老女

◯Bブロック

▽1回戦

高山 16―12 斐太

富田女 15―10 瑞浪

▽決勝

高山 16―15 富田女

◯Cブロック

▽1回戦

本巣 24―3 岐阜北

羽島北 21―9 大垣農

▽決勝

本巣 22―8 羽島北

▼決勝リーグ

県岐阜商 12（7―4、5―4）8 本巣

高山 15（10―7、5―6）13 県岐阜商

本巣 13（6―8、7―3）11 高山

〔順位〕①県岐阜商②高山③本巣

# 北信越

## 新潟県高校春季大会

（5月2、3日／新潟江南高校）

〈男子〉

▼予選リーグA組

柏崎 36―10 巻

柏崎 33―7 新潟明訓

柏崎 23―12 新潟江南

巻 27―12 新潟明訓

新潟江南 31―18 巻

新潟江南 28―7 新潟明訓

▼予選リーグB組

長岡大手 41―10 中条工

長岡大手 20―7 中越

長岡大手 13―12 柏崎工

中越 21―19 中条工

中越 16―14 柏崎工

柏崎工 32―15 中条工

▼決勝

柏崎 26（8―10、10―8、3―3、5―0）21 長岡大手

〔順位〕①柏崎②長岡大手③中越、

〈女子〉

新潟江南

▼決勝リーグ

新潟江南 32（22―1、10―3）4 長岡大手

新潟江南 40（23―3、17―1）4 長岡中央

新潟江南 29（16―1、13―2）3 巻

長岡大手 17（8―4、9―8）12 巻

長岡大手 27（13―5、14―12）17 長岡中央

巻 23（11―7、12―5）12 長岡中央

〔順位〕①新潟江南②長岡大手③巻④長岡中央

## 第40回新潟県高校総体

（6月6、7日／中越高校、北部体育館）

〈男子〉

▽予選リーグA組

柏崎 28―8 中越

中越 30―16 新潟明訓

柏崎 31―6 新潟明訓

▽同B組

長岡大手 36―5 中条工

柏崎工 25―6 中条工

長岡大手 22―8 柏崎工

▽同C組

新潟江南 45―11 巻

巻 33―16 能生水

新潟江南 33―10 能生水

▼4位決定リーグ

柏崎工 23―17 巻

中越 19―19 柏崎工

中越 29―19 巻

▼決勝リーグ

柏崎 23（12―7、11―7）14 新潟江南

柏崎 14（10―2、4―11）13 長岡大手

長岡大手 18（9―5、9―6）11 新潟江南

〔順位〕①柏崎②長岡大手③新潟江南④中越

〈女子〉

▼決勝リーグ

新潟江南 33（20―2、13―3）5 巻

巻 26（9―8、17―8）16 長岡中央

新潟江南 49（24―2、25―3）5 長岡大手

巻 13（8―6、5―4）10 長岡大手

長岡大手 23（11―2、12―7）9 長岡中央

新潟江南 47（25―1、22―2）3 長岡中央

〔順位〕①新潟江南②巻③長岡大手④長岡中央

## 第23回北信越高校選手権

（6月20、21日／新潟・柏崎高校、柏崎工業高校）

〈男子〉

▼1回戦

屋代（長野）37（21―6、16―7）13 中越（新潟）

小松明峰（石川）18（12―9、6―8）17 金津（福井）

小諸（長野）20（11―12、9―4）16 長岡大手（新潟）

氷見（富山）30（14―7、16―8）15 新潟江南（新潟）

▼2回戦

高岡向陵（富山）25（12―8、13―8）16 屋代

小松明峰 18（9―4、9―11）15 柏崎（新潟）

北陸（福井）25（11―3、14―1）4 小諸

小松工（石川）21（10―9、11―11）20 氷見

▼準決勝

高岡向陵 22（10―6、12―8）14 小松明峰

北陸 23（12―9、11―10）19 小松工

▼決勝

高岡向陵 29（12―6、17―7）13 北陸

〈女子〉
▼1回戦
小松市女（石川）47（22—2、25—1）3 長岡（新潟）
高岡商（富山）23（7—2、16—13）15 屋代（長野）
佐久（長野）43（22—5、21—1）6 長岡大手（新潟）
仁愛女（福井）43（18—2、25—3）5 巻（新潟）
▼2回戦
小松市女 17（8—7、9—6）13 福井商（福井）
高岡商 17（7—8、10—7）15 新潟江南（新潟）
有磯（富山）25（14—10、11—11）21 佐久
小松商（石川）16（9—6、7—5）11 仁愛女
▼準決勝
小松市女 27（11—8、16—7）15 高岡商
小松商 31（13—4、18—3）7 有磯
▼決勝
小松商 14（8—3、6—4）7 小松市女

# 近畿

## 全国高校総体京都府予選

（5月31日、6月7、13、14、20、21日）

〈男子〉
▼1回戦
堀川 23—7 鴨沂
西宇治 35—6 成章
京都西 38—13 塔南
東山 50—18 伏見工
▼2回戦
大谷 27—10 堀川
洛西 74—4 宇治
洛陽工 26—20 城陽
久御山 23—10 洛星
嵯峨野 17—10 東宇治
洛北 26—17 同志社
桃山 32—13 平安
西宇治 16—11 木津
桂 14—12 京都西
城南 22—6 西乙訓
向陽 39—5 南八幡
洛水 14—12 洛東
東稜 16—15 乙訓
日吉丘 24—15 東山
▼3回戦
大谷 28—7 洛西
久御山 28—18 洛陽工
洛北 23—14 嵯峨野
西宇治 20—16 桃山
桂 16—13 城南
北嵯峨 17—13 京都西
向陽 23—6 洛水
東稜 18—15 日吉丘
▼準々決勝
大谷 23—7 久御山
西宇治 25—8 洛北
桂 21—9 北嵯峨
東稜 16—15 向陽
▼準決勝
大谷 21—9 西宇治
桂 14—10 東稜
▼3位決定戦
西宇治 23—19 東稜
▼決勝
大谷 11（5—6、6—3）9 桂

〈女子〉
▼1回戦
北稜 14—12 洛水
嵯峨野 10—8 西乙訓
京都女 36—1 西山
桃山 21—4 日吉丘
洛西 16—14 乙訓
鴨沂 14—11 久御山
向陽 39—1 府立商
光華 9—6 田辺
塔南 16—9 精華
南八幡 12—8 洛北
東稜 16—8 山城
西宇治 22—13 西京商
桂 12—11 城南
北嵯峨 15—12 洛東
▼2回戦
東宇治 54—3 北稜
京都女 23—5 嵯峨野
桃山 21—4 洛西
向陽 19—3 鴨沂
塔南 20—16 光華
東稜 17—9 南八幡
西宇治 16—5 桂
明徳商 21—11 北嵯峨
▼3回戦
東宇治 13—9 京都女
向陽 17—8 桃山
東稜 14—8 塔南
西宇治 16—8 明徳商
▼準決勝
向陽 6—4 東宇治
西宇治 8—7 東稜
▼決勝
向陽 20（8—2、12—4）6 西宇治

## 奈良県高校総体

（6月6、7、13、14日／生駒市総合体育館ほか）

〈男子〉
▼1回戦
生駒 36—1 広陵
郡山 18—15 高田東
▼2回戦
添上 19—16 生駒
天理 20—9 片桐
東大寺 23—16 上牧
正強 25—11 斑鳩
奈良 20—15 一条
畝傍 23—14 富雄
奈良工 34—12 十津川
橿原 30—6 郡山
▼3回戦
添上 23—9 天理
東大寺 14—12 正強
奈良 29—16 畝傍
橿原 38—11 奈良工
▼準決勝
添上 21—12 東大寺
奈良 21—16 橿原
▼決勝
添上 27（18—8、9—11）19 奈良
※添上は7年連続24回目の優勝。

〈女子〉
▼1回戦

一条 31―1 桜井商
短大付 17―9 郡山
白藤 32―2 上牧
▼2回戦
添上 28―8 一条
短大付 19―5 片桐
富雄 25―3 十津川
白藤 15―10 生駒
▼準決勝
添上 11―7 短大付
白藤 18―8 富雄
▼決勝
添上 13（5―5、8―4）9 白藤
※添上は8年連続16回目の優勝。

## 中国

### 第22回鳥取県高校総体

（6月7～9日／米子南商高、境港市第二市民体育館）

〈男子〉
▼1回戦
米子北 15―5 米子西
倉吉工 28―3 倉吉東
境 29―8 境港工
▼準決勝
米子東 39―9 米子北
境 26―8 倉吉工
▼決勝
境 19（12―4、7―10）14 米子東

〔戦評〕境はDFで全員がよく動き、早目、早目に攻撃をつぶす。それに対して米子東は、打たせて速攻を狙うパターン。前半、境・板倉のロングシュートがよく決まり、米子東はマンツーマンDFをかけるが、今度は高野にロングシュートを決められ、DFのリズムを崩し12―4と大きくリードされる。後半に入り、板倉のロングをよく止め速攻で巻き返すが、前半のハンデが大きく、結局19―14で境が勝利を収めた。

〈女子〉
▼1回戦
米子南 15―4 米子東
倉吉産 25―5 倉吉西
米子北 12―6 米子西
▼準決勝
境 35―9 米子南
米子北 16―5 倉吉産
▼決勝
境 15（7―1、8―3）4 米子北

〔戦評〕前半、立ち上がりからスピーディな展開で速攻のボールをつなぐ境、浜田の速攻、瀬島のカットインなどで7―1とリードを広げる。後半に入ってもスピードは衰えず、GK安倍を中心とした固いDFに阻まれて、米子北は最後までペースをつかめなかった。

## ユーゴ〝メドベスチャク〟来日親善試合

ユーゴの男子クラブチーム、メドベスチャクを招いて、7月17日から24日まで、日本各地5会場で親善試合を行った。アジア選手権への出発を控えた全日本チームは3試合を行って2勝1敗、上々の仕上がりで本番に向かった。

メドベスチャクは、他に湧永製薬、大崎電気と対戦、結局通算成績2勝3敗で帰国した。

▽7月17日（山口県徳山市）
全日本 26（14―6、12―11）17 メドベスチャク
▽7月18日（広島）
メドベス 27（13―15、14―10）25 湧永製薬
チャク
▽7月21日（愛知県名古屋市）
全日本 20（10―10、10―8）18 メドベスチャク
▽7月23日（東京）
メドベス 22（10―8、12―11）19 全日本
チャク
▽7月24日（埼玉県草加市）
大崎電気 32（15―12、17―14）26 メドベスチャク

## 九州

### 鹿児島県高校総体

〈男子〉
▼1回戦
加世田 37―8 出水工
笠沙 27―21 甲南
戝部 22―12 甲陵
薩南工 27―19 鹿児島商
▼2回戦
鹿児島工 27―9 加世田
穎娃 21―3 志布志
鹿児島南 29―20 加治木工
隼人工 32―28 笠沙
鹿児島中央 43―23 戝部
川内商工 22―15 指宿
加治木 26―25 出水
大島 47―18 薩南工
▼3回戦
鹿児島工 42―16 穎娃
鹿児島南 24―19 隼人工
鹿児島中央 38―6 川内商工
大島 58―19 加治木
▼決勝リーグ
鹿児島工 21（10―5、11―8）13 鹿児島南
大島 33（16―10、17―13）23 鹿児島中央
鹿児島工 22（10―2、12―6）8 鹿児島中央
大島 30（14―9、16―11）20 鹿児島南
鹿児島南 26（10―9、16―13）22 鹿児島中央
鹿児島工 28（16―8、12―10）18 大島

〔順位〕①鹿児島工②大島③鹿児島南④鹿児島中央※鹿児島工は2年ぶり15回目の優勝。

〈女子〉
▼1回戦
鹿児島純心 50―11 志布志
川辺 21―10 川内商工
大島 21―6 出水
鹿児島南 24―9 岩川
国分実 24―8 鹿児島中央
串木野女 15―12 戝部
奄美 38―3 串良商
▼2回戦
鹿児島純心 48―1 川辺
鹿児島南 18―5 大島
国分実 29―3 串木野女
牧園 39―5 奄美
▼決勝リーグ
鹿児島純心 18（7―7、11―2）9 鹿児島南
国分実 21（8―8、13―6）14 牧園
牧園 15（9―4、6―6）10 鹿児島純心
国分実 20（12―3、8―4）7 鹿児島南
牧園 22（9―6、13―4）10 鹿児島南
鹿児島純心 18（10―5、8―3）8 国分実

〔順位〕①鹿児島純心②牧園③国分実④鹿児島南※鹿児島純心は初優勝。

アシックスは
オリンピックキャンペーンの
オフィシャルスポンサーです。

# 百個のグリップ力。アウトドア専用。

## マルチコンソールが、グラウンドを確実にグリップする。初のアウトドアハンドボールシューズ、スカイハンド®SL。

アウターソールには、片足に100個以上のポイントを独特の形状で配置。アウトドアのグラウンドコンディションに確実に応えるハンドボールシューズの登場です。側面には傾斜をつけ、倒れ込みシュートを打ちやすく。かかと部を拡げて着地衝撃を吸収しやすい形状に。大空での空中戦を、十二分に意識した、初めてのハンドボールシューズです。

品番 THH 501 品名 スカイハンド®SL
メーカー希望小売価格 ¥9,200
カラー/ホワイト×レッド
　　　ホワイト×ネイビーブルー
サイズ/22.5～28.0cm

**株式会社アシックス**

●お問い合わせは株式会社アシックス消費者相談課までどうぞ。〒650 神戸市中央区港島中町7丁目1番1 ☎(078)303-2233(専用)(078)303-3333(大代)
〒130 東京都墨田区錦糸4丁目10番11号 ☎(03)624-1814(専用)(03)624-2221(大代) ■本文中Ⓡは㈱アシックスの登録商標です。

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第二六五号
昭和四十年六月 日 第三種郵便物認可
昭和六十二年七月二十五日 印刷
昭和六十二年八月一日 発行
東京都 神南一—一—一
電話 代(〇三)三四六一—
振替 東京 六—五八三四八番
編集兼発行人 大野金一
定価三百五拾円
(年間購読料三千二百円)